

令和2年11月23日

公益財団法人 庭野平和財団
理事長 庭野 浩士 様

公益財団法人 PHD 協会
事務局長 坂西 卓郎
研修担当 山本 健太郎
TEL : 078-414-7750
Email : info@phd-kobe.org

庭野平和財団 NPF プログラム“緊急助成”
完了報告書提出について

拝啓

時下ますますご盛栄のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

貴財団の助成を賜り、ネパールの「ダリット」コミュニティの人々に対して緊急の生活支援を実施することができました。心より感謝申し上げます。下記の通り、完了報告書と収支報告書を送付いたしますのでご査収の程よろしくお願ひ申し上げます。

敬具

記

1. 完了報告書（「ダリット」への食糧配給及び感染症拡大防止のための啓発活動）
2. 収支報告書（「ダリット」への食糧配給及び感染症拡大防止のための啓発活動）

以上

コード No. 20-S-012

提出日：令和 2 年 11 月 23 日

令和 2 年度

「ダリットへの食糧配給及び感染症拡大防止のための啓発活動」

報告書

団体名 公益財団法人 PHD 協会

記入者名 坂西 順郎

山本 健太郎

1. プログラムの目的

【背景】

ネパールでは、2020 年 7 月 7 日までに新型コロナウイルス感染者 16,200 人以上が発見された。政府は同年 3 月 24 日以降、ロックダウンを継続していたが、これにより多くの人は職を失い、食料を手に入れることができずに飢餓や貧困に苦しむ人が増加した。また必要とされていた検査能力の不足、感染者数の増加に伴い、下記の問題が浮き彫りとなつた。

- ・ネパール地方域での絶対的貧困者数の増加
- ・検査機器（PCR 用）が限られているため、感染検査数が十分でない
- ・人々の間で感染対策措置が十分に取られていない（手洗い、消毒、ソーシャルディスタンス等）
- ・感染拡大が著しいインドの境界線を越えて、次々と人がネパールにやってくる
- ・インド、アラビア諸国へ出稼ぎ中のネパール人が急遽帰国
- ・労働市場の停滞、失業率の大幅な増加
- ・ロックダウン長期化による人々の絶望、混乱状態によるうつ病発症
- ・上記期間中の自殺件数が 2 倍に（経済的プレッシャー（失業等）による）

【目的】

当事業の支援対象であるダリットはネパールのカースト制度の最下層に当たり、「不浄」「穢されたもの」と呼ばれ、生まれながらにして差別をうけている。ダリットであるという理由のみで十分な教育やサポートを受けられず、ネパール国内のダリットコミュニティ全体が今回のコロナ禍における他国の団体の支援等からも外されている。ダリットのような社会的および経済的に弱い立場にあり、貧しく、脆弱な人々、そして疎外されたコミュニティは、今回の新型コロナウイルス感染症のような予期しない自然発生的およびその他の問題（災害等）が発生した際に、より大きな問題に直面する。このプロジェクトは、こうしたダリットの人たちのために、下記の 3 つの目的で実施された。

- 1) COVID-19 感染拡大による悪影響によって引き起こされる飢餓からダリットコミュニティの人々の命と健康を緊急的な食糧配給により守る。
- 2) 感染予防のための衛生用品を当コミュニティの全世帯に充足させる。

- 3) 地域住民が COVID-19 感染予防の知識を身に付け、自らの安全と健康のために必要な行動の習慣づけがなされる。

2. 主な活動内容・スケジュール

このプロジェクトの具体的な活動として、食糧配給と衛生用品配給、感染症拡大防止のための啓発活動を実施した。PHD 元研修生であるラムテル氏とサルキ氏が生活するカブレパランチョーク郡ジトリポカリ村、ラトマタ村とその周辺地域を中心に行つた。当事業を実施する上で必要となる支援対象世帯の情報、スケジュール調整、食糧配給と啓発活動の事前準備、フォローアップの方法等に関して、現地カウンターパート NGO の SSS（サマ・セワ・サムハ）と PHD 元研修生のラムテル氏、サルキ氏と協議の上で決定した。

※SSS と PHD 協会についての説明は下記の通り。

SSS (サマ・セワ・サムハ)

28 年前、地域のソーシャルワーカーや農民、商人、教師などが持続可能な参加型コミュニティ開発組織として開始。彼らの努力により、SSS は非営利かつ非政府組織団体として活動を始め、貧しく、排他的に扱われている立場の弱い人たちを社会的、かつ教育や経済、健康や環境の分野にわたくって、継続的にサポートしてきた。また、地域の健康増進や妊娠や避妊、飲料水のプロジェクトや配管工事の実施、資金管理と運用、科学的かつ生産的な農業、学校建設や恵まれない女の子たちへの教育奨学金、マイクロクレジットの導入、分析能力の向上などのプログラムを通して、貧しいダリット女性たちの生活支援、収入向上を行ってきた。

SSS と PHD の間にある関係性には、40 年に及ぶ歴史がある。PHD 第 1 期研修生として招聘されたバラタ・ビスタ氏（1981 年度）はかつて家族福祉プロジェクトでソーシャルワーカーとして働いていた。ビスタ氏は PHD での 1 年間の研修の学びを生かして SSS を設立した。地域で貧しく、立場の弱い疎外された脆弱なコミュニティの人々のため、現在も活動を続けている。

公益財団法人 PHD 協会

1962 年から約 20 年間ネパールで医療活動に従事した岩村昇医師が自らの経緯と反省をふまえ、「物」「金」中心の一時的援助を越えた草の根レベルの人材交流・育成を提唱し、1981 年に設立。アジア・南太平洋の村の青年を研修生として日本に招き、農業、保健衛生、地域組織化などの研修を行い、帰国後もフォローアップを行う事を通じて、草の根の人々による村づくりと生活向上に協力している。ラムテル氏（サビナ・ビスンケ・ラムテル）とサルキ氏（スシラ・バセル・サルキ）それぞれ 2018、2019 年度に PHD 研修生として来日し、日本で 1 年間の実地研修を積んだのちに帰国した。

【事前準備】

当事業を進めるまでの事前準備はラムテル氏とサルキ氏を中心に行われた。具体的には、支援対象者の情報とリストの作成である。上記 2 名が責任を持って地域の各世帯を回り、必要な情報を収集した。(下記の表 1 と表 2 に該当)

表1 - ジトリポカリ村、周辺地域のグループメンバー数、世帯数、総人数

No.	グループ名	地域	人数		
			グループ メンバー	世帯数	総人数
1	ハラバラ グループ (ラムテル氏、サルキ氏所属)	ジトリポカリ村	34	32	141
2	ジョディプティ グループ	バハテゴン村	32	32	168
3	ジョルワ グループ	ラトマタ村	28	27	121
4	ラリグラス グループ	パウワ村	28	28	117
合計			122	119	547

表2 - 村のカーストとジェンダー分析

No.	グループ名	カースト	人数				
			男性	女性	10 才以下		
					男の子	女の子	
1	ハラバラ グループ (ジトリポカリ村)	ダリット	66	68	11	10	
		先住民族	4	3	0	1	
		その他	0	0	0	0	
		合計	70	71	11	11	
2	ジョディプティ グループ (バハテゴン村)	ダリット	42	48	5	7	
		先住民族	16	10	0	2	
		その他	29	23	1	4	
		合計	86	81	6	13	
3	ジョルワ グループ (ラトマタ村)	ダリット	61	60	11	12	
		先住民族	0	0	0	0	
		その他	0	0	0	0	
		合計	61	60	11	12	
4	ラリグラス グループ (パウワ村)	ダリット	37	34	3	5	
		先住民族	20	18	0	1	
		その他	5	3	0	1	
		合計	62	55	3	7	
総数		ダリット	206	210	30	34	
		先住民族	40	31	0	4	
		その他	34	26	1	5	
		合計	280	267	31	43	

上記の表 1 は、それぞれの村のグループにどのくらいのグループメンバー、世帯、総人数がいるかを明記している。(このプロジェクトの受益者総数は 119 世帯、547 人、平均で 1 世帯当たり 4.60 人が生活している。) 各世帯人数を村ごとの平均で比較すると、バハテゴン村（ジョルワグループ）で最大値 5.25 となり、パウワ村（ラリグランスグループ）では、最低平均人数は 4.18 人となる。ジトリポカリ村（ハラバラグループ）とラトマタ村（ジャルワグループ）の世帯平均人数はそれぞれ 4.41 人と 4.32 人である。

表 2 は、地域全体の 76.05%、つまり 416 人がダリットに属していることを示している。また、全体の 12.98% にあたる 71 人が先住民カーストである。そして、わずか 10.97%、つまり 60 人が他カーストに属している。カーストは異なるも、この地域で暮らす人たちの生活は貧しく、新型コロナウイルス感染症拡大による貧困に苦しんでいる。4 つの村の総人口のうち、13.53% にあたる 74 人は 10 歳未満の子供（男の子 31 人と女の子 43 人）である。上記のデータは非常に興味深く、男の子に比べて女の子の数はほぼ 3/5 である。女の子と男の子が 11 であるジトリポカリを除くすべての村では、女の子は男の子よりも多い。2 つの村（ジトリポカリとラトマタ）では、すべての人々がダリットカーストに属している。バハテゴンとパウワ村では、ダリット、先住民、その他のカーストがそれぞれ 56.49%、22.46%、21.05% です。もう 1 つの注目すべき点は、10 歳未満の子供の総人口の 86.49% がダリットカーストに属していることである。全人口の中でダリットカーストの比率は 76.05% で、他のカーストよりも子供が多いことを明確に説明している。

【食糧・衛生用品配給】

2020 年 7 月 1 日の全体会議での決定に従って、当事業のスケジュールと具体的な支援内容を作成した。（次項の表 3、4 に記載）当地域における村の人たちの貧困状態が緊急を要したこと、国内で急激に悪化する COVID-19 の感染リスクを避けるため、3 回に分けて予定していた食糧支援を 1 回でまとめて実施する必要があった。計画時に予定していた総配給量に代わりはない。また、今年度研修生として来日する予定だったチャルマカール氏もこの活動にボランティアとして参加した。食糧・物資の買い出し、仕分け、配給作業の順に実施された。

SSS の事業チームは、カブレ地区で最大の都市であるバネパ市の全売り手から商品の質や価格見積もりを収集した。彼らは、商品の価格と品質を分析し、それらが妥当な場合に必要なすべての商品と数量を「パリヤストア（PARIJA Store）」で注文した。7 月 20 日と 22 日に、バネパから商品を輸送するために小型トラックが用意された。

2020 年 7 月 20 日、ジョディップティおよびラリグランスグループの 60 世帯、2020 年 7 月 22 日には、ハラバラおよびジョルワグループの 59 世帯、米 30 キログラム、豆（レンズ豆）2 キログラム、食用油 2 リットルなどの救援物資、各家に配布された塩 2 キログラム、石鹼 2 枚、タオル 1 枚が配布された。

表3一事業スケジュール

グループ名	食糧配給	衛生用品の配給	啓発活動	フォローアップトレーニング	実施場所
ハラバラ	7/22	7/22	7/19, 7/27	10/5-6	ジトリポカリ村事務所
ジョディップティ	7/20	7/20	7/15, 7/30	10/7-8	バハテゴン村事務所
ジョルワ	7/22	7/22	7/18, 7/26	10/5-6	ジトリポカリ村事務所
ラリグラス	7/20	7/20	7/14, 7/29	10/7-8	女性グループメンバーの家

表4ー支援内容（食糧・衛生用品配給と感染症拡大防止のための啓発活動）

	メニュー	世帯数
食糧配給	1 セット/世帯 ・米 30kg、レンズ豆 2kg、食用油 2L、塩 2 パック	119
衛生用品の配給	消毒液 1 ボトル、タオル 1 枚、石鹼 1 個、バケツ 1 つ	119
感染症拡大防止のための啓発活動	・公衆衛生指導（オリエンテーション） ・新型コロナウイルス感染症の症状と危険性 ・手洗いや消毒、マスク着用の習慣化 ・社会的距離（ソーシャルディスタンス） ・感染時の対処	119

【感染症拡大防止のための啓発活動】

COVID -19 は、先進国および後発開発途上国のあらゆる地域で日々急速に広まっている。中には、病状が悪化して死に至った人もいる。日常生活の中でいくつかのステップを注意深く実践すれば、自身を感染から守ることができる。コミュニティの人々が新型コロナウイルス感染症の予防意識を高めるために、それぞれのグループメンバー向けに 2 回のトレーニング/オリエンテーションを作成した。

感染症拡大防止のための啓発活動は、SSS が運営するクリニックで助産師として働いている元研修生のウルミラ氏（2010 年度）の協力のもと実施された。ジトリポカリ村及び周辺地域のグループに所属する村人たちに対して、COVID-19 の特性、手洗いや消毒といった日頃の感染症対策の重要性について指導した。

この活動は 2 段階に分けて実施された。実施日時や参加世帯数は次項の表 3 の通りである。第 1 レベルのトレーニングは、COVID -19 の特徴をコミュニティの人々に提供するために組織された。（e.g. どこでいつ最初に現れるか、それが私たちの生活にとってどれほど危険か、COVID - 19 の症状はどのようなものか）第 1 レベルのトレーニングの第 1 部はビジュアルを用いて説明された。トレーニングの第 1 レベルの第 2 部は、人々が COVID-19 からどのように身を守るかについて議論が

なされた。主にデモンストレーションと実践であった。最初にファシリテーター (PHD 元研修生ウルミラ氏、SSS クリニック助産師) がこの項目について説明をし、次にデモンストレーションを行つた。具体的には、石鹼で約 20 秒手を洗う、消毒液を使う、口と鼻を覆うためにマスクを着用する、ソーシャルディスタンス (2 メートル以上の距離を保つ、接触や集まりを避ける等々) についての実演です。高熱、のどの痛み、風邪などの COVID -19 の症状を持っている場合、人々は保健所に行く必要がある。参加者はそう行動するように指導された。ラムテル氏とサルキ氏はトレーニングを積極的にサポートした。

次に第 2 レベルのトレーニングは、ロックダウン緩和策の実施直後に行う必要があった。第 2 レベルのトレーニングで取り上げられた項目は、以前の第 1 レベルのトレーニングの応用であった。COVID-19 の病状に加え、リプロダクティブヘルスや健康問題等、参加者たちの質問に応じて議論された。

表 5－感染症拡大防止のためのトレーニング（レベル別の参加世帯数）

グループ / 村	レベル別参加世帯		
	レベル 1	レベル 2	合計
ハラバラ グループ (ジトリポカリ村)	27	5	32
ジョディップティ グループ (バハテゴン村)	23	9	32
ジョルワ グループ (ラトマタ村)	22	5	27
ラリグラス グループ (パウワ村)	23	5	28
総数	95	24	119

【フォローアップ①：受益者アンケートと評価】

当事業における受益者に対して、ラムテル氏、サルキ氏、および SSS のメンバーが 3~4 日ごとに面会し、COVID -19 感染予防のためのトレーニングからの行動変化、および食糧配給後の生活状況の変化や意識レベルについてヒアリングを行つた。

村の人々の気持ちを理解するために、SSS はプロジェクトの影響を評価および把握するための簡単なアンケートを作成した。評価目的で、全世帯の 10% にアンケートに答えてもらうことにした。アンケートには次の 7 つの質問が含まれている。

質問①：感染症拡大防止のトレーニングで最も印象的なポイントは何だったか？

質問②：最近、何回手を洗っているか？

質問③：最近マスクをつけているか？はい、もしくは、いいえ。

質問④：なぜ？ また、その理由

質問⑤：配布された救援物資の中で最も必要なものは何だったか？

質問⑥：なぜ？ また、その理由

質問⑦：救援物資が提供されなかつた場合はどうなるか？

質問⑧：この活動を経て何か変わったことは？

ラムテル氏とサルキ氏が中心となり、フォローアップとアンケートを実施した。全世帯の 10%にあたる回答者を無作為に選択した。(各グループから 3 世帯) 選択のプロセスは、家の数を紙に書いて行われた。例えば、ハラバラグループから 3 世帯を選ぶために、32 枚の紙が用意され、各紙に 1 から 32 の紙が書かれ、メンバーに 3 枚の紙を引き出すように求めた。同様に全てのグループで同じプロセスが行われた。その後、12 人の回答者が選択された。アンケートで収集された情報は編集・分析された。評価の結果（メンバーの回答）は以下の通りである。

回答①：6 人の人たちは、「手洗いスキル（両手運動、少なくとも 20 秒間の手洗い（デモンストレーション）と社会的距離（ソーシャルディスタンス）」が最も印象的であると述べた。2 人のメンバーは、「個々の衛生状態」と言い、他のメンバーは「COVID-19 が 1 人から他者に感染する経緯」が印象的だったと述べた。

回答②：10 人の人が、1 日に 5~10 回手を洗うと答えた。1 人は 12 回、1 人は 1 日 20 回手を洗うと語った。

回答③：12 人全員が自分のマスクを使用すると述べた。

回答④：12 人全員が、他の人からのコロナウイルス感染を防ぐためにマスクを着用すると答えた。

回答⑤：それぞれ石鹼（3 人）、バケツ（3 人）、タオル（2 人）、米（2 人）、レンズ豆（1 人）および食品（1 人）が配布されたアイテムの中で最も有用であると述べた。

回答⑥：それらがアイテムの中で最も役立つ理由は次の通りである。

石鹼、特に「Dettol 社ブランド」は、昆虫類を殺すために最も有用である。バケツには持ち手があり、水に他のポットを使用する必要がない。タオルは清潔で、使用していたタオルのように汚染の心配をする必要がない。また、特にトウモロコシしか食べるのがなかつた人にとっては、米やレンズ豆の配給は彼らの栄養レベルを改善するのに役立ち、重要な食料となつた。

回答⑦：7 人のメンバーは、村から 1 時間 30 分ほど離れた場所にあるマンダン市場で、食品を掛け買いしなければならなかつただろうと答えた。3 人のメンバーは、はっきりと答えることはできないと語った。1 人は、さらに恐ろしい飢餓に直面しているかもしれないと言つた。ある人は、家に何もなく、生き残ることができなかつただろうと語つた。

回答⑧：6 人の人たちは他の村の人々や隣人に手洗いのスキルを教えていると答えた。5 人の人たちは、新しい人と会うときに外出するときに手洗いとマスクを使用することを共有していると述べた。ある人は他の人々に公衆衛生の重要性を共有すると語つた。

【フォローアップ②：感染症拡大防止のための実践トレーニング】

表 3 にある日程で、感染症拡大防止のためのフォローアップを実施した。このトレーニングは、ハラバラとジョルワで 10 月 5-6 日、ジョディティとラリグラスで 10 月 7-8 日で行った。主な目的としては、受益者たちが COVID-19 の最新の感染影響についての知識を得て、危険なウイルスから安全に影響を与えるために必要な措置を講じ、他の人々とも知識を共有していくことである。設定された目標を達成するために、トレーニングのカリキュラムは次の通りである。

- ・ネパールや他国での感染者・死者を含む COVID-19 の影響

- ・COVID-19 に対するワクチン接種の進捗状況

- ・自分たちの身を守り、感染拡大を防ぐための具体的措置（復習）

これらの内容に基いて、SSS スタッフ、ラムテル氏、スシラ氏を中心にそれぞれの村の人々はディスカッションを行つた。以前の啓発活動で得た学びの復習、そして実際に今できる COVID-19 への感染対策の再度説明（こまめな手洗いと消毒の徹底、ソーシャルディスタンス等）を通して、村の人々同士の知識共有や感染予防の実践を促すことができた。

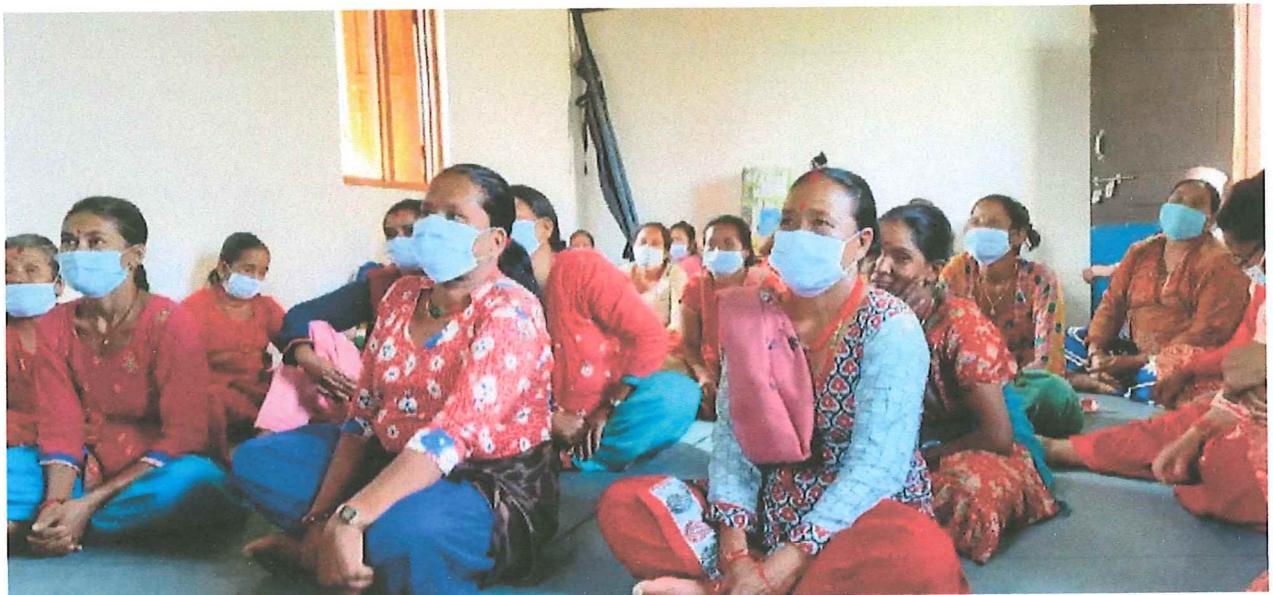
3. 助成を受けた活動の報告（様子がわかる写真等があれば貼付してください）

【食糧・衛生用品配給の様子（ラムテル氏、サルキ氏と村の人たち）】



【COVID-19 感染拡大防止のための啓発活動（SSS 医療スタッフからの指導）】





【フォローアップの様子（SSS スタッフと村の人たち）】



4. 活動の成果（成果物などがありましたらご紹介ください）

1) 感染症拡大防止に関する村人たちの学び

ジトリポカリ村周辺の多くの人々は、物理的に十分な距離を置いて他の人々と出会ったときにマスクを着用するとともに、日頃から手を洗っている。一部の世帯では、COVID-19 感染症予防のために石鹼やマスクの購入により多くのお金を費やしていると語っている。実際に啓発活動に参加した人は、COVID-19 感染から身を守るための考え方やアイデアを得たと述べた。彼らはトレーニングで学んだ知識を家族や隣人と共有した。また、今後近隣の村やグループと人たちにも予防法を伝えたいと語っていた。

2) 困窮世帯の救済

食糧配給を実施した日から生活困窮に苦しむ多くの世帯の生活状況が著しく変化した。特に家族の面倒を見ることになっている人（両親や大人たちを指す）の意識レベルが変化した。きっともう家族の誰も飢餓に苦しませずに済むと確信が持てたからである。今本当に助けを必要としている人に支援の手を差し伸べることができた点は、この事業の大きな成果である。

ある村の女性は、コロナ禍で抱いていた不安について次のように述べていた。
「ここ最近は何も食べることができませんでした。昨日は隣人に食べ物を分けてもらえないかとお願いしに行きました。以前だったら、どんな食べ物でも手に入れることができたけれど、今はもう現金もないです。過去 3 か月間のロックダウンがありました。だから、稼ぐ仕事がなくなってしまいました。田畠もないので、自分で農作物を手に入れることもできません。けれど、この支援のおかげで、少なくとも 7-8 週間は家族で食べるのに十分な量の食料があります。ありがとうございました。」

COVID-19 感染拡大の最中、人々は緊張感に覆われ、食糧不足問題に直面しなければならない。この問題は早急に解決されないが、村の人たちはこの問題を前に自分で対処しなければならないことを理解している。それは、自立した生活を送るための資源やアイデアのようなものである。当事業の実施により、彼らは生計を立てるための代替案を考える時間を得た事ができた。

3) 村人たちの相互扶助意識の向上

当事業はCOVID19 感染拡大下においても、庭野平和財団、SSS、PHD 協会、元研修生、多くの村人たちといった多くのステークホルダーの協力、支援、連携のもとで実現された。特に村人たちにとっては、助け合いや分かち合いの大切さを学ぶ機会となり、地域内における草の根のつながりが広がった。現場で積極的に事業を統括した PHD 元研修生のラムテル氏とサルキ氏は次のように述べている。

ラムテル氏 「私たちの村がとても困ったときに私たちの声を聞いてくれてありがとうございます。庭野財団のみなさんのサポートで村の人たちの生活が少し楽になりました。助け合いがあると私たちと村の人たちの気持ちも強くなりますし、いつも頑張ろうと思います。本当に心からありがとうございます。」

サルキ氏 「庭野財団の皆さん、私たちの村にいるダリットの人たちのためにサポートをいただきありがとうございました。困っている人たちの生活が楽になりました。村の人たちもとても喜んでいました。これからも私たちは村の人たちと心と心を合わせて強い気持ちをもって頑張ってい

きます。本当にありがとうございました。」

5. 今後の課題

ネパールにおける COVID-19 感染拡大は、現在に至るまで留まるところを知らない。（下記 図6参照）ネパールの人口（約 2,870 万人）は日本の人囗（1 億 2,570 万人）に比べて四分の一以下にも関わらず、感染者数の伸びは圧倒的に上回っている。ネパールでは医療体制が脆弱な上、いまだに政府から国民に対する具体的な支援政策等も示されていない。そのため、当事業の食糧・日用品配給によりダリットコミュニティの中で困窮状況を一時的に脱した世帯もあるが、さらなる状況の悪化に村人たちは怯えている。

村の人たちの貧困（特に食料難、雇用難等）といった課題は残っている。先の見えない新型コロナウイルス感染拡大禍において、与えるだけの支援では彼らの自立に繋がらない。その点、彼らが啓発活動で身に付けた COVID-19 に関する知識や予防習慣はコロナ禍を乗り切るための生活のノウハウであり、今後へも繋がっていくものである。今後もダリットコミュニティの住民同士が助け合い、主体的に生活していくよう状況を注視していきたい。

図6—COVID-19 感染者数推移（ネパールと日本比較、2020 年度）

